

〈翻字〉九州大学附属図書館蔵 『伊勢物語注』（仮称）【一】

吉丸, 志穂  
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10359>

---

出版情報：文献探究. 36, pp.31-55, 1998-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

〔翻字〕 九州大学附属図書館蔵 『伊勢物語注』 (仮称) 〔一〕

吉丸 志穂

九州大学附属図書館音無文庫蔵の伊勢物語注釈書を翻字する。本書は、縦三

〔凡例〕

・二センチ、横一六・一センチの四巻四冊。表紙には題簽の跡があるが剥落して

おり、書名は不明である。ここではわたくしに『伊勢物語注』と称する。巻一、

三、四は巻頭に遊紙二丁、巻一は同じく遊紙二丁、いずれの巻にも内題はない。

巻一は墨付六七丁、巻二は七二丁、巻三は七二丁、巻四は九二丁。一面十行。巻

二までは、伊勢物語の章段が代わることに朱で章段番号を記す。巻四の最終丁に

寛政十三辛酉のとし

きざらぎ七鳥写之筆

の識語を有する。

本書がいかなる系統の注釈書であるかは俄には断定しがたいが、一見すると「近  
来の説」というかたちで契沖の『勢語臆断』をしばしば引用する一方、後水尾院  
の『伊勢物語聞書』など堂上の注釈書の影響も見出される。なお、本書について  
の具体的な報告は他日を期す。

○ふりがなは本文中の( )内に記す。

○誤字、衍字、脱字はそのまま翻字し、(ママ)とした。

○漢字については、旧字、異体字、宛字など、極力原態を尊重した。

○濁点はすべて底本通りとした。

○便宜上、読点を付した。

○補入、ミセケチはその都度( )内にその旨記した。

○原本は巻二まで朱の章段番号を付すが、本稿はそれを含め、百二十五段の章段  
番号を付した。

○おどり字については、漢字の場合は「々」、仮名は「ゝ」、二字以上の場合には  
「／＼」を適宜用いた。

○底本の丁数は、丁の終わりに「印」を付けて、アラビア数字と、オ(表)ウ(裏)  
の略号とによって示した。なお丁数は、遊紙、扉紙の有無に拘わらず、墨付の  
冒頭を第一丁として示した。

○墨で消してある部分には■を付けた。

【翻字】

此伊勢物語は定家卿の説によるに、業平自記の物語有りて、その後伊勢が筆をそへたる故、伊勢物語と号するよし也、ゆへに自記の段、作り物語の段と分て心得る事也、顕昭の説にも朱雀院のぬりこめに業平自筆の伊勢物語有りつる事見えたり、此物語いにしへは数本有しと見えたり、業平自記の本、具平親王の御本、是を真名伊勢物語といふ、高階一位の尼の本、加茂の内侍の本、長能か本などいにしへ異本多かりしを、定家卿、天福年中諸本をあはせ證本を定られしを天福本ともいひ、又武田本ともいふ、一オ」是は元来今川家の家蔵なりしを武田家に傳へたり、甲州乱後行方を不知といふ、長能本には齋宮の段を初段に出して伊勢物かたりといふ儀を立たり、此外にも雁の使の段を端に書たる本有り、世尊寺伊(コレ)行の所為也ともいへり、又伊勢物語と号するに一説有り、清輔袋草紙にのせたり、是は伊勢人のひかこと、いふ事ふるくよりいひ傳へたる事ゆへ、ひか事ものかたりといふ心にて、伊勢物語と名付たりといへり、伊勢人のひかことの事は哥にもよめり、堀川院後のたひ百首に忠房、いせならはひかことそとも思はまし大和なるてふみま1ウ」さかの池、又夫木集、加茂の長明、伊勢人ひかことしけり對馬よりかつ川ゆけはいつみの、原、又伊勢はいもせといふの中畧の言にて、いもせものかたりといふへきを略して、いせものかたりといふともいへり、一決しかたき事なり、

一 業平官位の事は三代実録等にくわし、但此物語に載る所諸人の官位所々相違

の事有り、作り物語のゆへなるへし、又古今集と此ものかたりの趣相違の事有り、是は古今集を正説とし、この物語をは作りものかたりと心得へし、後

撰拾遺等も2オ」是になぞらふへし、すへて勅撰を正説とたつる事也、

一 此物語上下にわかつことふるくより如此、上卷四十八段下卷七十六段有り、

上下合て百二十四段なり、入木の傳に此ものかたり婚礼等に用る本には、思ふこといはてそたゝにやみぬへきの段と、つゝに行道とはかねてといへる段

と、二段をのせざる事也、是は婚姻本とて能書の家古実とせらるゝ事也、

2ウ」

初段【朱】

むかし男

むかしと句をきりて男とよむへし、業平をむかし男といへる説は誤り也、當時の事を書たるものなれとも、わざと時代をさゝざる故むかしとは書たり、

去年は今年のむかしなれはそのことゝわりなきにあらず、此物語に古注有りて業平をむかし男といへるよし書れたれとも、いまは不用事也、むかしは時

代をさゝざることはとみるへし、竹取物語宇治拾遺等にいまはむかしと書出したるに同じ、源氏ものかたりにもいつれのおほん時にやと3オ」かける同

し心也、

うるかうふりして

うるかうふりは古注には叙爵と心得たり、一条禪閣の御説にも叙爵と注し給へり、叙爵は従五位下に成る事也、是をかうふり（くノミセケチ）たまふといひ、又初位とも日本紀などに書たり、五位以上位田ある故也、具平親王の真名伊勢ものかたりには元服の事と心得て書せ給へる様に見へたり、此事別考有り、三光院殿御説曰来叙爵の説をすて、うるかうふりを元服とみる事也、うるかうふり「ふり」と書へき事なるを、うると書事はいにしへの叙爵の説よりあやまり来れると見へたり、稚もしひのかななるを四位の事に多よみなしたり（ママ）より、いまは四あのかな也、かやうの例多き事也、業平元服の年月は不可考、色々の説有れとも用に不足、おとこといふ字もいにしへはをとこをどめ同じ事にて、はしのをを書たるを、中古よりおとこはおくのお、をとめははしのを、書事となれり、いはれなき事なれ共、今は中古のかなに随ふへし、4オ」

ならの京かすかの里に

ならの京はその東は添のかみの郡西は添の下の郡に古の都あり、奈良の宮は添の下の郡にあたり春日の里は添の上の郡にして東の京なり、ならの京のうちにある春日の里と心得へし、しるよしして

しるよしは萬葉集に領の字をしようとよませたり、知行といふに同じ、しかれとも知行の知の字、知る心に非ず、つかさとする心也、しかれば知行の知をしる4ウ」とは和訓しかたき事なれとも、なまそらへて知るよしとはかけるにや、

後水尾院御説にはあなち知行所と見るに不及、しるへありてと大様に見てよからんかと書せ給へり、此説も又やはらかにて信すへし、かりにいにけり

いにけりは行けり也、俗には来るものゝ帰るをいぬといへとも、只行事をいぬるともいへり、かりはかりそめにといふ説あれとも鷹狩の説を可用、業平元服の後やかて春日の里に行たるに5オ」は有へからず、この物語業平の一生を書んとはしめにうるかうふりとは書出したる成るへし、狩に行たるはいつにても有へき事也、

その里にいとなまめいたる女はらから

其里は春日の里也、いと是最の字又甚の字等をいとよめり、いたくといひ、いとゝいふ皆同じ心也、なまめくは遊仙窟に（はノミセケチ）婀娜（アタ）の一字をなまめくとよませたり、うるはしきかたちの事也、はらからは兄弟の事也、同胞と云、又日本紀には親親とも書たり、同じはらから生れ出たる故、兄弟をはらから5ウ」ともいへり、源氏物語には猫の子にもはらからといふ事をいへり、此春日の里の姉妹、古注には紀の有常か女とあれとも、この説不可用、哥書のみみ人しらすになまそらへて、その名をさゝさる事也、すへてこの物語古注には人の名をかきたれとも今はことくよみ人しらすの心みる事也、

この男かいま見てけり

かいま見は垣間見と書也、元來ものゝひまよりうちをうかかふ事也、竹取翁

ものかたり、大和6才」物かたり等にもあることは也、大和物語にはかいまめとも書たり、源氏物語には猶多きことは也、あなち垣よりのそくにもあらず、物こしにほのかに見たる心に見るへし、

おもほえずふる里に

おもほえずは思ひの外の儀也、思ひかけすといふに同じ、ふるさとゝは奈良の京の事也、業平在世より五十年ほど以前、平安城に都うつりて奈良は旧都となりたる故、平城天皇の御哥にも、ふるさとゝ成にしならの都にもとはよ6ウ」ませ給へり、此旧都になをやることなき人の残り居たる躰也、はしたなくは玄旨の説によはきものに強くあたる様の心をいふと有り、又つきなく似合ざる心ともいへり、はしたといふ詞にて、なくはそへ字と見るへし、竹取物語に、みこはたつもはしたいるもはしたとあるも、はしたなき心也、うつほ物語、いとはしたなき心をなしてとあり、又源氏ものかたり、玉かつらの巻に、かへらむもはしたなくとあり、又清少納言にもはしたなきといふ事有り、ふるさとにかゝる7才」人のすむはたよりなくおちつかさる心にも見るへし、源氏物語きりつほの巻にいとはしたなきこと多かれとあるも同じ心也、このあれたる所にやんことなき人のたよりなけにてするを見て、男の心をかけたることを、こゝちまとひにけりとかけり、この所、ければとあるのは字心を付て見るへし、都にはやんことなき人あまた有る所なればさして目たゝす、かゝるふるき都にたまゝなまめける人を見出たるよりいよ

／＼心のまよふ躰なり、

かり(補入)きぬのすそをきりて7ウ」

業平鷹狩の序にこの人を見せめられたる躰也、哥をおくるに、折からその哥をつくへき花もみちもなきゆへに、此かりきぬのすそをきりて哥をかきたると、又そのかりきぬのすそに哥をむすひ付けてやると一説也、いつれにも随ふへし、なを此所別考有り、此時業平しのふすりの狩きぬを着されたりと見へたり、春日野にはむかしより紫をよみならはせり、女を紫にたとへてよむこと例多し、此時幸に着けるかりきぬ、またしのふすりなる故取合せて哥にはよめり、8才」春日野ゝ若紫にてする衣といふ事にはあらず、大よみにみるへし、

春日野ゝ若むらさきのすり衣忍ふのみたれかきりしられす

此哥、新古今集恋の一、在原業平朝臣と入る、しのふすりはあひにてもすりむらさきにてもする事也、すり衣すり衣清濁いつれにもしたかふへし、三光院殿此物語を五度よませ給へるに、一三度はにこりてよませ給へるといひ傳へたり、上の句は序也、しのふの乱れかきりしられすといはんためにもうけたることはなり、しのふは8ウ」その人をしたふ心也、此女をほのかに見しより思ひみたれたることのかきりもしられすとの心也、頭輔卿の哥に、きのふ見ししのふのみたれ誰ならん心のうちそかきりしられぬ、をいつきていひやりける

此所一説有り、一説には融のおとゝの哥を本うたにして業平のよまれたると見る事也、一説には融のおとゝの哥をわか哥に用ひて返しとしたる也、まっ

本哥と見る時はをひつきてはやかてといふ心也、伊勢か家集にも奈良坂のわ  
9才」なりにそれをひつきておこせたりけると有り、業平の此女をみてやかて  
此哥をよみてやりたるは、折からのつておもしろきころにてよみてやりた  
るにやとみる事也、又此融公の哥を女のかたよりの返哥と見る時は、業平の  
哥を女の方にて返しせんと思ひて案するに、いとまなければやかてとりあへ  
ず此古哥を用ひて本哥としたる也と心得へし、此哥を返哥と心得る時は融公  
の哥と言葉は同じくして心をとりかへたるなり、9ウ」

みちのくの忍ふもちすり誰故にみたれ初にし我ならなくに  
哥の心、かきりしられす思ひみたれたるとの給ふは、たれゆへ思ひ乱れ給ふ  
と、われゆへにてはよもあらしといひかへしたる也、融公の哥はわれとわか  
心をたれゆへかくのごとくは思ひみたれたるとなけきたる心なり、  
といふ哥の心はへなり

是も本哥に見ると返しにみると一説なり、本哥に見る時は業平の哥は融公の  
哥と同じ心はへなりといふに同じ、この物かたりの末に、10才」むさしの  
心なるへしと有るに同じ、むかし人といへるも本哥にみる時は伊勢か筆  
にて業平の事をむかし人とはかけり、いちはやきは早速の心、みやひは風流  
也、いにしへの人はかくのごとくいちはやく風流のふるまひをなしたること  
(二字、同字ミセケチ)よと業平の哥一首を賞美したることは也、又此哥を  
返哥と見る時は、たとへ女のかたよりあらたに哥をよみて返しにするとても  
融の哥と同じ心はへなるゆへ、あらたによますしてこの哥を用ひたるとの心

也、此説にては10ウ」むかし人といふはもつはら女をさしていへる心也、  
早速に融の哥をとりてわか哥となしたる事、いまの人のおよふまじきはたら  
きなるゆへ、それをほめたることはに見る也、定家卿勅物にかゝせ給へる趣  
も業平と融とは同時の人にて、いかほと成る先達にもあらざるに、業平の本  
哥にとられたることを不審に思ひてかゝせ給へる様に見へたり、みやひはい  
なかひるといふことはに對して見るへし、いなかはいやく都はやさしき心  
にてみやひとは11才」いへる成るへし、閑の字をも又都といふ字をもみや  
ひとよませたり、

## 二【朱】

むかし男有けり

此段は隱語にてかける段也、業平の自記と見へたり、ぬしある女に心を通は  
すゆへその事をあらはに書すして隱語を用ひたり、哥も又ぬしある女におく  
るゆへ用意してよめる哥なり、

ならの京ははなれ

奈良の京は天子七代の都なりしを、桓武11ウ」天皇延暦二年十一月に都を  
山城國長岡にしはらく移され、同十三年に今の平安城にうつされたる也、す  
てに奈良の京ははなれていまの平安城は遷都の砌にて人の家居も定まらずと  
かける也、心を付てみるへし、業平廿はかりの比より五十年前以前遷都の事あ  
れば人の家居定まらずといふことひとつの不審也、是隱語の段のしるし也、

其時代をかくさんため四五十年も以前の事に書なさんとて、わざと遷都のみ  
きりのやうに書なし「2才」たるなり、扱此平安城は西の京よりつくりそめ  
東の京は後につくられたる也、都つりの折からにてあるゆへ、いまた東の  
京は作りおほらず西の京にのみやんことなき人のすみたる比、業平の心を通  
はず女も同じ西の京にすみたる也、

世の人にはまされりけり

定家卿自筆之本其外古本にも(はノミセケチ)世人と有るを、よの人とよむ  
事は後宇多院の御諱世仁と申せしより世の人とよむ事也、たとへは「2ウ」  
大学に国人を国たみとよむは後嵯峨院の御諱をはかりて也、此女まつ容儀  
のまされる事を書出で、その人かたちよりは心は猶まさりたりと一段にかけ  
る所面白し、まつその容儀世上の人にすくれ、心は猶容儀よりはまされりと  
いへる心なり、此女たれといふ事をしらす、  
ひとりのみもあらざりけらし

ぬしある人にて、やもめならざるとの心也、ひとりのみもおほめて書た  
る所隠語なり、実に夫有る人故は、かりて書たるなり、「13才」

まめ男うち物かたらひて

まめは實也、又忠の字をもまめとよむ、日本紀に忠誠の二字を合てまめとも  
よませたり、源氏物語にまめ人といへるに同じ、好色のなく実躰成人とい  
ふ心也、ぬしある女に心をかくるはまめ人のふるまひにあらず至極好色の人  
なるをわざとまめ男と書たる所、我罪をかくしてみつかからかける文章と見へ

たり、うちものかたらひてとは、ものかたりなとして(ママ)いふに同じ、  
是も実にはその人に逢ひたる事なれともぬし「3ウ」ある人ゆへは、かりて  
た、ものかたりなとしたるまでの事のやうに書なしたるなり、  
いか、思ひけん

その女に對面の後、宿に帰りていか、思ひけん、此哥をよみたと、他人の  
事をいへる様に書なしたるも、例の隠語也、

時はやよひのついたり

是は歌の心を釈せんとて書たる也、其時は弥生のついたりこころ雨のこまかに  
ふる日といふ心なり、そほふるは古来より「説有り、添ふるといふ心「4ウ」  
の時は雨のしきりにふる心也、またこまかにふる雨をそほふるといふ也、  
しほくとふるといふに同じ、後撰集こと書に、雨のそほふりける日女郎花  
ほりに野に出たる事有り、これら細雨と見へたり、新古今集、重之の哥に、  
春雨のそほふる空のおやと(ママ)せずおつるなみたは花ぞちりける、これ  
ら皆こまかにふる雨と見へたり、

おきもせずねもせてよはをあかしては春の物とて詠書しつ

此哥、古今集恋一、在原業平朝臣と有り、定家卿のこと葉に、恋の歌よまん  
時は凡骨を「4ウ」はなれて、おきもせずの哥に心をなしてよめとおしへら  
れたると也、此哥幽玄の哥と見へたり、なかあめは春のころふる雨をなかあ  
めといふにそへて、春は男のもの思ふ時にて空となかめ忙然として居る事  
をそへてよみたる哥なり、歌のこころ夜はおきたるにもあらずねたるにもあ

らすして夜をあかし、昼は忙然として日をくらすことをとかむる人あれば、  
是は春のならひにて誰も如此なかめかちなりとこたへて終日なかめくらすと  
の心也、下の心は如此夜昼一五才」對面せし人を思ひて心のうちにわすれさ  
るとの心也、ぬしある女におくる歌ゆへおもてにはその心をあらわさす下  
ふかき思ひをいひのへたる也、源氏物かたり、柏木の多もんの女三の宮へお  
くれる文を源氏見給ひて、あたらん人の文を思ひやりなく書たりと見おとし給  
へる事あり、この業平の哥の用意してよめるに引あはせて見るへし、千載集、  
和泉式部か哥に、つれくるとふるはなみたの雨なるをはるのものとや人の見  
るらん、此段も此段の哥一五ウ」の心にてよめるなり、

### 三【朱】

むかし男ありけり、けそうしける

けそうは掛想(ケンソウ)也、人に思ひをかくること也、此けそうしける女  
とあるは一糸の後の御事なり、

ひしきも

ひしきもは和名集に鹿尾菜と有り、又六味菜ともいふ、和名ひしきも也、す  
ととしと五音相通す、かやうのいさゝかのをまいらするは、わか心ざし一  
六才」をのへんためなり、

思ひあらは律の宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも

此哥は万葉集に、玉しける家も何せん八重むくらははひたる宿もいとすま

は、又六帖の哥に、何せん玉のうてなも八重律はひたるやとにふたりこそ  
ねめ、此六帖の哥を抄物には萬葉の哥とあり、猶考ふへし、いつれにても此  
二首の哥を本哥にてひしきをかく(ノミセケチ)してよめる哥也、哥にて  
はひしきとすむ一六ウ」へし、思ひあらはといふ五文字、思ふ人とあらはの  
心といひ、又思ひなき身にあらはとはことをそへてみる説、みな不用、身に  
思ひありては玉のうてなも何かせん、律の宿に成とも思ふ人とふたり寝んこ  
そ本意なるへけれ、そのむくらの宿にはひししくものもあらしとおもへは、  
たかひの袖をひく(補入、ママ)しくものにしてあらはやとの心也、此思ひ  
あらはといへる五文字、業平の哥の心一七才」あまりてことはたら一七ウ」  
さる所なるへし、新古今雅経の哥、たえてやは思ひありともいか、せんむく  
らの宿の秋の夕暮、

### 一糸のきさき

是は伊勢か加筆なるへし、如此御名をあらはに書事心得有へし、如此みつ  
の事も世にかくれなく末代までもそつき名の残れるを、やんことなき人の  
心得ざ(ママ)給ふたぬにかける成る(補入)へしと抄物等に見へたり、二  
条の後は中納言長良の卿の御女にして御名高き子、貞観元年十一月廿日五節  
の舞姫よりやかてめしと、めて後、元慶一八才」元年に中宮とは成り給ふる  
也、此哥の事、大和ものかたりにもせられたり、返しをなんん人わすれけり  
とあり、然ればむかしは御返し有たる、

四【朱】

むかしひんかしの五条に

ひんかしの五条とは地名也、五條の皇太后と申は則閑院冬嗣公の御女、御諱順子、仁明天皇の後、文徳天皇の御母、清和天皇の御祖母也、天子の御母を皇太后と称する事也、御祖母をは太皇太后と称する也、此五条の後順子は染殿の後の御ためには御姨（ヲハ）也、此物語作者のことはに染殿（一〇ウ）の后を五条の皇太后と書たるは不審也、大鏡にも此段の御事を書いて皇太后は順子の御事と書たれば、染殿の後にあらざる事分明也、それとの、后は貞観六年正月に皇太后と申たれば此段に不合、此事猶末につまひらかなり、西のたいに

西のたいとは五條の後順子は寝殿にすみ給ひ、二条の后はその寝殿の西の對屋にすませ給ふ事なり、一〇ウ」

ほいにはあらて

ほいにはあらては本意にあらすして也、又ほにはあらはるゝなどいふことくほいにあらすとは、ひそかにいふことにみたる説もあり、後水院（ママ）の御説、非本意といふ説につかせ給へり、

心さしふか、りける人

心さしふか、りける人とは業平の事也、前にけそつしける人とあるに同じ、行とふらひけるとは折節此西のたいに通ふ事也、正（ム）月の十日はかり外にかくるゝとは此密通の事あらはれし後しはら一〇ウ」く御父長良の卿の御

もなどにつり給ふ事なるへし、一条禅閣御説に入内の事とあるはいかゝ、有所はきけと

女のかくれてある所いつかたといふ事は業平のしられたれとも、行かよふへき所にあらすと也、なをうしといふ、猶の字心をつけてみるへし、此西のた いさへたやすく行通ふへき所にあらざるに、ましてそのかくれ居給ふ所はなをかよふへき所にあらざる故、うしと思ふ也、二〇ウ」

又のとしの

又の年とは其翌年、世上の梅の花盛りなる比、去年のことを思ひ出て、せめては去年すみ給ふ所なりとも行て見んと思ひ立て行けるなり、

たちてみあてみ

立てみ居てみとは、或はたち或は居る事にして、ふたつのみの字は助字也、ふりみふらすみなどいふに同じとあれとも、見る心にて心通すへし、せんかたなき時のことに、たちても居られすあても心のすますなどいへるに同じ、二〇ウ」

こそになるへくもあらず

こそになるへくもあらずとは去年此所にかよひ来りて二条の后にあひまいらせし時とは何事もかはりたる跡也、うちなけきてあはらなるいたしきに月のかたふくまでなけき居たる跡、その夜の有様見るかことくに書出したり、月のかたふくまでと有て、末に夜のほの／＼と明るにとあれは、十五六日比の事と見へたり、あはらはあれたる跡也、たとへあれすとも其すむ人のおはせ

ぬゆへあれたるやうに思ふへき事なり、21才」

月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもとのみにして

古今集恋五、在原業平の朝臣と有り、此哥古来よりいろ／＼の説あれとも一決しかたし、月は去年の月にあらぬかとうたかひて去年の月も今年の月もひとつ月也、さらば春か去年の春とはかはれるかと思ふに、春も同じ春なり、もとよりわか身は去年来りし身にてかはる事もなければとも何事も去年に似ざるは、此所にすみ給ひし人のおはせぬゆへ也と落着したる歌なるへし、猶説々ある事也、21ウ」俊成卿の哥に、梅の香も身にしむころはむかしにて人こそあらぬ春のよの月、此哥此段の心を得てよみ給へるなり、

夜のほの／＼と明るに

其人ゆへにその所をしたひて夜ふかくも帰らず夜の明るまで立やすらひたれとも、夜明ては人めもつ、まじきゆへな／＼／＼帰りたる跡、あはれふかし、ほの／＼は月のくらくして分明ならぬ跡なり、

### 五【朱】

昔男有けり、ひんかしの五条22才」

此段は前段より已前の事也、惣して此物語の段前後昆雑の事多し、なつみてみるへからず、是も二条の後にまいり通ひける間の事とみるへし、みそかなる所なれば

みそかなる所とはひそかなる所といふに同じ、西のたいへ通ふ所、御所の門

よりはいらすしてついちのくすれより通へる也、ついちはずひち也、又つかきともいふ、ひちは土也、土形と書てひちかたといふ氏あるにて知へし、土を以つきたる垣な22ウ」れば、つかきとも又つひちともいふ也、そのくすれたる所より男の通ふ跡也、清少納言に人にあなつらるゝものといふ條下に、ついちのくすれと有り、源氏須磨の巻にも、長雨についち所所くつれてとあり、

人しけくもあらねと

もとより門ならねは人の往来もなく静成る所なれとも、たひかさなるゆへにおのつからことあらはれて、五条の後の御耳にも入たる也、六帖の哥に、逢ことをあこぎか浦にひくあこ(ママ)のたひかさな23才」らは人もしりな

その通路に

ついちのくつれたる所に人をすゑて、通ふ人をめしとらえんなど、かまへられたる成るへし、男もそのあたりまではゆけとも、まもる人ある故むなしくかへり／＼て、此哥をよめるなるへし、萬葉集の哥に、やまたちをとなみか関にあすよりはもりへやりそへ君をと、めん、

人しれぬ我がよひちの関守はよひ／＼ことにうちもねな、ん

此哥、古今集恋の三に、業平の朝臣と有り、23ウ」うちも寝な、んはうちもねよかし也、人しれぬ我通ひ路とは、かのわらへのふみ分たるついちのくすれをいへり、こゝに人をすへてまもらせらるゝ故、関守とはいへり、此通

ひ路をままれる人のうちもねよかし、そのねたるあいたに心安く行かよはんとの心也、源氏ものかたり、藤のうら葉に、関守のうちもねぬへきけしきにおもひよはり給ふとかけるも、此段の心也、家隆卿の哥に、清みかたわか通ひ路の閑なれやうちぬる人も波のよるく、24才」

いとこころ心やみけり

心やむとは此哥を聞給ひて二条の後の御心やましくなけき給ふ也、又玄旨のには、染殿の後のあはれと思ひて業平をあはれみ給ふ心ある也と有り、いづれにても義通すへし、あるしゆるしてけりとは其意通をゆるし給ふへすへしあ、ノミセケチにはあるへからず、罪せらるへきをそのまゝさしおかれし事なるへし、清正集の哥に、おほつかなくもれる空の月みれば心やましき空にもあるかな、24ウ」

二条のきざきに忍びて

是又作者の注也、伊勢かこと葉と見るへし、世上に此事の間へあるゆへ、二条の後の御兄昭宣公・国経の大納言など、その所をまもりふせかせられしなるへし、

六【朱】

むかし男有けり、女のえうましかりけるを

此段作りものかたりと見る事也、えうましかりけるとはえかたきと云事也、わかものとしかたき心也、人丸の哥に、なま名のみ辰の市とはきはけともい

さまた人をうるよしもなし、25才」此心に見るへし、古今集のこと書には、女を得と有り、同じ心也、年をへてよはひわたるとは、年久しくいひかよふ事也、よはひといへることは竹取物語に出たり、源氏、玉かつらの巻にもけそつ人は世にかくれたるをこそよはひとはいひけれとあり、万葉集に結婚の二字をよはひとよませたり、是等にて男女の情を通すること、しるへし、からうして

辛勞して也、後撰集のこと書にも、からうして25ウ」あへりける女にと有り、竹取物語にも、ひねすみの皮のことからうして人を出してもとめて奉ると有り、此からうしてを玄旨の説におもしろくしてと注せられたるは心得かたし、真名伊勢語(ママ)にも辛の字を書たり、いとくらきに来けりとは、くらき夜に女をいさなひ出る躰なり、

あくた河といふ河を

あくた河は摂津国の名所なり、是につきて説々あれとも作り物語なれば其分26才」に見るへし、禁中のちりあくたをなかつ河といふ説も有り、後水尾院の御説には、その道筋にある河と見るへしとか、せ給へり、

草のうへにをきたりける露を

此女をいさなひ出るに、もとより宮中にのみおはして夜道なとあるかせ給はぬ人ゆへ、草のうへの露の白きをかれは何そととひ給ふも、男のこゝろ行ききをいそくゆへ露ともこたへさること、末の哥にてよく見へたり、るては率の字又持の字也、いさなひつれて行事也、26ウ」

ゆへとまきおほく

是は行きき遠くと心得へし、心ざして行所は道遠く殊に夜更たるゆへ鬼ある所ともして、しはらく女をあはらやにやとしおきたるなり、

神さへいといみしうなり

此さへの字心をつけて見るへし、道遠く夜更たるうへに神なり雨ふる躰至極難儀の有さま也、時といひ所といひものすさまじき躰をかきあらはしたり、清少納言に、かきくら27才「し雨ふりて神もおとろくしくなりたればものもおほへすと有り、

あはらなるくら

人なき家の躰也、くらは座の字をくらくとよませたり、末にあはせ考ふるに、此くらはぬりこめなどのくすれたる所とも見るへきにや、

をこご弓やなくひをおひてとくちにをり

男の弓やなくひをおひたるにつきて、業平は中将なれば神なる時弓箭を帯し雷鳴の陳(ママ)に伺公するなといふ説あれとも此説いか、27ウ「あらん上古の躰、男たるものは弓箭を帯して夜行することの躰に見へたり、中将少将の官にかきるへからず、其上業平左近衛権佐になれるは貞観六年の事也、このころは一条の後童女にておはしける時の事なるへし、竹取ものかたりにも、此まもる人々弓箭を帯してと書たり、是等に合て考ふへし、女をはおくにいれ、みつからはそとに弓箭を帯して夜の明るをまぢるたる躰也、はや夜も明よかして(ママ)ねかふ心なり、28才」

鬼はやひと口にくひてけり

此鬼といへるは実の鬼にあらず、人にとりかへされたるを作り物語にて鬼とはかける也、鬼にくはるゝ時あゝと女のさけひたる声も神鳴さはきに男はきかざる也、やうく夜明行比見れば、つれ来る女も(補入)居ざる故足すりをして男のかなしむ躰をいへり、あしすりはいとまなき子の親なとしたふ時必する事也、萬葉集、山上權良か子をうしなへる時の長哥に、たちおとり足すりさけひふしあふきと有り、又浦鳴か子をよめる28ウ「長哥にもあしすりのこと有り、源氏あけ巻の巻に、ひきとゝむへきかたなく足すりもしつへくとあり、かけらふの巻にも、足すりといふことをしてなゝさまわかき子共の様なり、と有り、

しら玉か何そと人のとひし時露とこたへて消なまし物を

此哥、新古今哀傷(補入)の部、在原業平の朝臣と有り、是は実に女の鬼にくわれて死たることになして哀傷の部に入られたると見へたり、撰者の心子細あるへし、尋ぬへし、哥の心かの草の上の露をしら玉か何そと女のとひし時、其答合を29才「せざりし事を思ひ出て、其時かれは露そとこたへて其露のことくわかいのちきえたらましかは今かゝるなけきはせましきものをとの心也、このをの字心を残すをの字也、元真集の哥に、しら玉か何かととはん人もかな物思ふ袖をさしてこたへん、

いとこの女御の御もとに

いとこの女御とは忠仁公の御女、染殿のきき(ママ)の事也、一条の後は長

良の卿の御女故染との、后とは御いとこ也、つかうまつる様にてとは正しく宮つかへ29ウ」し給ふにはあらてひとつ御所におはせし間の事と見へたり、かたちのいとめてたくとは、遊仙屈に可愛の二字をめてたしとよませたり、ほめたることは也、御かたちのうるはしきにめて、業平のうはひ奉たることをいへり、

御せうとほり河のおと、

せうとは兄也、堀川のおと、は昭宣公の御事也、昭宣公は国経大納言の弟なれとも御伯父染殿のおと、忠仁公の御子となり給ふ故、大臣に至り給へり、国経は兄なれ共大納言にておは30才」れる人也、ゆへに太郎国経とは書たり、この大納言をしやなさんとよむ事ならひ也、せいなさんとよむ人も有り、いつれにても大納言とはよまさる事也、子細ある事なるへし、

内へまり(ママ)給ふに

内は内裏也、堀川のおと、国経の大納言はまた下藤にて内裏へまいる給ふ道に、このあはら成るくらにて女のなくを聞て立いり見給ふに、御妹なる故やかく取返し帰り給ふ事を鬼一口にくひたるとは書たる也、是は業平の自記に如此30ウ」作り物語のやうに書なされたるを、又伊勢か筆をくわへてその実をあらはせるにや、

またいとわかつて

二条のきざき十七才已前の事なるへし、后のた、にとは、た、は凡(タ、)人也、后にておはせし時の事にはあらず、としもわかた、人におはせし時

なれば、かやうのみたりかはしき事もさのみ御罪にあらしといふ心にてかきそへたるにや、

七【朱】

昔男ありけり

業平あつまに下向の事は外に無所見、然れ31才」とも古今集に此あつま下りの哥のせられたれば、さたかに有りける事と知るへし、此物語にくたらず本といふ有り、是は実に業平のあつまに下らさることをしるせるよしへり、今其本を見ず、伊勢物語切紙などいへるものには、二条の後の事あらはれてのち東山に閑居の間をあつまにくたりたるになすらへてかけるよし見へたれとも是又信用しかたし、續日本紀(ママ)第十九、嘉祥二年正月無位よりはじめて従五位下に叙せられたる人の、三代実録第六には貞観31ウ」四年三月正六位と有りて此時従五位上をさつげられたるよし見へたり、此時業平三十八歳なり、文徳実録には業平の事一所も不見、然れば従五位下に叙せられたる人の後に正六位の上とある時は此間に罪有りて位一等を下し四拾歳に及まで六位にてあられたるやうに見へたり、此時あつまにも下られたるにや、その身阿保親王の御子にてやんことなき人也、二条の後又藤氏の女にて此時父兄の家さかり(ママ)なればかた／＼其罪をあらはしかた／＼業32才」平吾人其位をおとしてすておかれたるにやといふ説近來有り、此説にまつ随ふへし、このあつまくだりの段は發端三段に書たり、皆おなしやうにて次第

に文章をくわしく書たり、此所心を付て見るへし、  
京に有わひて

業平あつまに下向の事さきにいふかごとし、其子細しれされとも京にすむこ  
ともうき事有りてあつまに下るとの心也、次の段には京やすみうかりけん  
とかき、其次の段には身をやう32ウ「なきものにおもひなして京にはあら  
しとかける、次第に其事をくわしく書たる所心を付て見るへし、  
いせをはりのあはひの海つらそ

京をたちまつ伊勢尾張の海つらをすくる躰を書たり、海つらは海へ也、万葉  
集に川邊と書て川つらとよませたり、濱つらともいふことなり、此うた後撰  
に入たるには、河をわたりけるに波の立けるをみてとあり、此物語とは少し  
相違なり、いつれか是なることを不知、波のいと白く33オ「立を見てとは、  
旅のならひよろつものかなしく都をしたふ心より波のたつをさへめをつけて  
見たる所あはれふかし、

いと、しく過行かたの恋しきにうらやましくもかへるなみかな

此哥、後撰集十九、羈旅に業平の朝臣と有、過行かたとは跡になりて遠さか  
る都の事也、さらつてに都を恋しく思ふ折から海つらにうちよする波のたち  
かへるを見て、わか身の故郷の帰りがたきをかこち波のかへるをうらやみた  
る心也、33ウ「

八【朱】

昔男ありけり、京やすみうかりけん

此段前段の次也、京やすみうかりけんとは他人の事の様につからかきな  
たる也、もとより都にすめる人京をすみうく思ふは、其身にゆへある事と見  
へたり、

友とする人ひとりふたりして

是は年ころ業平の友とする人の是も都にすみわひたるをいさなひて行躰也、  
古注に此友とする人の名を出したり、いまは不用事也、古今集、旅の部に兼  
輔の、玉くしけふたみの浦はとよ34オ「める哥のこと書に、供にありける  
人々とかけるは従者の事にて、こゝに友とする人とかけるにはかはれり、京  
に住わひてあつまのかたにしはらくすむへき所をもとめて行躰あはれふかし、  
あさまのけふりはいま東海道よりは見へす、故に玄旨抄にもむかしはけふり  
の過分に立ていせおほりのかたよりも見へたるにやといふ説有り、

信濃なる浅間のたけに立煙をちこち人のみやはとかめぬ

此哥新古今集羈旅の部に業平の朝臣と入、遠近人は旅人也、萬葉集に彼比と  
書て34ウ「をちこちとよませたり、かなたこなたの人といふに同し、みや  
はとかめぬとは、はるかにて見ゆましまあま(ママ)のけふりの見ゆれば誰  
とても見とかめぬ人はあらしとの心成るへし、景色をありの儘によみ入てた  
けたかき哥也、都にのみすみて此山のけふりをはしめて見たる心より誰とて  
もこのけふりを見とかめぬ人はあらしと興したる也、旅はかなしきならひな  
れとも時にあたりては又興ある事も多きもの也、信濃なることほりたるも

はるかに此けふりをみて、35才「かれこそしなのなる浅間か嶽と思ひよれる所を有のま、にいひのへたる也、信濃なるは信濃にある也、萬葉に在の字を皆なるとよませたり、

九【朱】

むかし男ありけり、其男身をえうなきものに

此段は又前段の次と見るへし、身をやうなき物とは、世に用ひられぬ身と思ひとりて京には住ましあつまに行てしかるへき所あらは其所にしはらくすまんと思ひ立て行也、一本には任へき所と有り、35ウ」

もとより友とする人ひとりふたりして

むかしより友なひてしたしき人とつれ行躰也、前段に友とする人ひとりふたりして行けりといへるをくわしく書たる也、道しれる人もなしといへるあはれに心細き躰也、此紀行次第相違せる所あるは此文章にてよく聞へたり、道しる人もなきゆへ順路をゆかすしてあらぬ所々にさまよひあるきたる事とみるへし、

みかほの国八はしといふ所にいたりぬ

此八橋といへるにつきて玄旨の説に、もの数八36才「を限りにしていふものなれはかくいふなるへし、八にはかきるへからすといふは心得かたし、此書にそこを八橋といひけるは橋を八つわたせるによりてとかけるにてしるへし、その数八つ有ゆへ八橋とはいへる也、水行川のくもてとは水のくもて

のやうになかれ行所故、かなたこなたにわたせるはしのその数八つありたる也、後撰集の哥に、うちわたしななき心は八はしのくもてに思ふことは絶せし、六帖、恋せんと成れる三河の八橋のくもてに物をおもふころかな、36ウ」

その沢のほとりの

はしめには水行河とかき、こゝには其沢と書たる、又義相違の様なれ共、大様に見るへし、おりるるは日本紀に下の字をおりるとよませたり、馬上よりおりるるにもかきらす、其沢邊におりるて休む躰に見るへし、

かれいひくひけり

かれいひは餉の字也、干飯をいふ様なれと、たゝいひの事と見るへしといふ説あれとも、清輔の哥に、旅つともてるかれいひほろくとな37才「みたそおつる都おもへは、此哥此段をうつしてよまれたると見へたり、此ほろくといへることはつねの飯とは不見、干飯なるへし、すゑになみたおとしてほとひにけりと有るにあはせ考ふへし、古今集こと書に、ふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれ飯とうへけるて(ママ)あるは、常の飯のやうにも聞へたり、天子の御膳をも朝餉といへり、これらも干飯にはあらざるへし、名は同じくして其事のかはれる事をしるへし、37ウ」

かきつはたいとおもしろく咲たり

かきつはた、かいつはたとも書り、此草いつもしあるものゆへ句ことの上におきて折句の哥をこのめる也、此物語にては友なる人のこめ(ママ)ると見

へたり、古今集のこと書にては旅の心をよまんとてよめるとあり、少し事替れり、かきつはたは燕子花なり、

から衣きつ、なれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしそ思ふ

此哥古今集竊旅の部に業平朝臣と有、きつ、といひ馴しといひつまといひ替(ママ)衣のえん38才にして少くさり過たる哥なれとも、折句なれば難にあらざるへし、哥の心大かたの旅さへかなしきならひなるを、まして妻なと都にある身は猶旅の行を思ひやりてかなしく思ふへき事也、旅をしそ思ふといふは古郷を思ひ行末を思ふ心こもれり、しまかくれ行舟をしそおもふといふに同じ、

みな人かれないひのうへに

友なる人感涙を催したる躰也、なみたの落て干飯のほとひたる、(ママ)かけるは少しはいかいの躰なり、38ウ」惣して紀行には狂哥などいゝる、も皆一興にして紀行の躰也、土佐日記などにも此文法見えたり、

ゆき／＼とするか国に

ゆき／＼といふに三河を過、駿河にいたれる也、其間に遠江をこめたる也、うつの山にいたりてとは、此所道細く心ほそき躰を書あらはさんとて也、わかいらんとする道はとかけるにて、むかしは東海道の道筋もあまた有りて一すしならざることを知へし、いとくろうとは夏山のしけれる39才」躰也、萬と楓のしけれるさま心を付てみるへし、萬楓はとあるを萬楓葉といふ説は不可用、てにはに見るへし、まへの道はといふに、てにはかさなりたる様な

れ共かへつててにはに見るかた面白し、すゝろは不意と書、心ならずといふ事也、漢書に辛のをすゝろとよみ、文撰に坐の字をすゝろとよませたり、此坐の字を文撰の注には無故(ムコ)て(ママ)書たり、又漫(マン)の字をすゝろとよめり、是はゆへなくみたりかはしき躰也に今すゝろとかけるは不意の二字につくへし、心な39ウ」らすかゝる心細き所にいたれる事をなきて行所に思ひかけなく修行者に逢て、かゝる道にはいかておはしたるよといひかけられておとろき見れば、むかし都にてしれる人なりとの心也、此す行者を僧正遍昭といふ説有、又素性ともいへり、皆不可用、誰ともしれざる事なり、

京に其人の御もとにて

是はやんことなき人と見へたり、誰ともしらす、一糸の後の御事にやといふ説有り、文かきて40才」つく(清音符号有)は附る也、ことづくるといふに同じ、

するかなるうつの山へのうつゝ、にも夢にも人にあはぬ也けり

此哥新古今集竊旅に業平朝臣とあり、うつの山邊といふをうけてうつゝ、といひ、うつゝ、のみならずゆめにも人に逢ぬとはよめり、いひめたる(ママ)哥にておもしろし、六帖、をとに聞うつつの山邊のうつゝ、にも夢にも見ぬに人の恋しき、此段の心をとりて、後京極、うつの山こえしむかしの跡ふりて萬の枯葉に秋風そふく、家隆卿、思ふ事萬のもみちにかきつけつ都におくれ40ウ」宇津の山風、

ふしの山城（ママ）見れば

五月のつこもりとかけるにて、あすは六月也、暑氣のさかりなる比、此山に雪のふれるを見て其興したる躰なり、

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらん

いつれの山にても四季折々の氣色はしる事なるに、時しらぬ山といふへきは此ふしのね也、さ月つこもりをいつと思ひてかくのことくかのこまたらに雪はふるらんといへる也、時しらぬ山はふしのねといふあたり「41オ」誠に中将の口なり、かのこまたらはむら／＼に見ゆる躰也、家持集の哥に、志賀山のみねなればこそしら雪のかのこまたらにふりて見ゆらめ、定家卿、此業平の哥をとりて、時しらぬ里は玉川いつとてか夏の垣ねをうつむしら雪、

その山はこゝにたとへは

こゝとは都にての心也、是は其時道中にて見たる躰を都にてしるすときの言葉也、都のあたりにては第一高山はひえの山なる故、いまふしのたかき事をいはんには、ひえの山をはたちかり（ママ）かさねあけたる「41ウ」ほとたかしの心也、是よりひえの山を都のふしとはいへり、但し拾遺集に、わか恋のあらはにみゆるものならは都のふしといはれなましとよめるを、ひえの山と心得るはあやまり也、拾遺集につきて説をうくへし、山の高さはひえの山を二十もかさねあけたらんほとにて其かたちをいは、しほしりの様也と書り、はたちといふことはいまはとしをかそふることに葉にいふ様なれ共、二十といふことにて、うつほ物語には沈のおしきはたちとも書たり、すへても

をかそふることには見るへし、源氏物語にも、とを「42オ」はたみそよそな

とかける聞し心也、しほしりの事古来より説々有り、むかし此物語に異本ありてはしりぼしと書たる本も有りたるよし定家卿の勘物に見へたり、壺塩といへるも同じ事と見へたり、此事寂蓮など信用の説なれ共いやしきたとへなれば不可用よし先へ（ママ）の命ありしと定家卿勘物に書れたり、此先人であるは俊成卿の事と見へたり、うつほ物語に壺しりといふもの有り、つほは上ひろくそのかたすほきも「42ウ」のなればそれをふせたるかたちの似たる故つほしりといへるにや、此うつほ物語のつほしりは器の名也、こゝにしほしりとかけるつほしりといへることはかよひて聞、猶考ふへし、定家卿たしかに不知との給へる事なれば、其分に見ておくへし、

なをゆき／＼て

さきにゆき／＼とあるに猶の字をそへたるは、行々重行々といふに同じ、此猶の字にて多くの道を過ぎ伊豆相模を越て行躰也、みちのくにくだ「43オ」れる人の下総へは何故むかはれたるならんなど、いふ説あれ共、さきにも道知れる人もなくてとかけるにて、あつまのかたをそこはかとなくさまよひあるきたる躰と見るへし、すみた川は武蔵と下総の間なると（ママ）分明也、た、し東科日記には此川をあすた川と有りて、中将の集にすみた川と有りかけり（ママ）、此中将の集といへるは中将の自記など其比有りて書るにや、また此ものかたりをさしていへるにや、つまひらかならず、むざしと相模との間に有りて書たる不審「43ウ」なり、此事別に考有り、

其河のほとりにむれあて

思ひやるとは都より此所まで来れる道のはるかなることを思ひてやすらひ居る躰也、日も暮ぬへし、はやく舟に乗れかし、と旅人の情をも不知、わたしもりの舟出をいそぐ躰なり、京に思ふ人なきにしもあらずとは、こゝに来れる旅人は皆都の人にて妻子の類都にのこれるを思ふ人のみとの心也、此すみた河につきて古来より駿河に同名ありといへり、是は44才「萬葉集第三に弁基法師の哥、まつちやまたこゑゆきていほさきの隅田川原にひとりかかもねん、此哥は駿河のすみた河なる事勿論なり、井蛙抄にも此事をのせたり、さる折しもしろき鳥の

かゝる折しも白き鳥のはしとあしとあかきといへる則都鳥のかた也、鳴のおほさきといふは鳴より大なるといふにはあらず鳴ほと、いふ事也、此都鳥はかもめのたくひにて鳴よりはや、おほいなる鳥なれとも、ひろき河の上になうきて遠44ウ「き所より見たるうハ（ママ）鳴ほと、はかきたる也、京に見へぬ鳥とは都には此鳥なし、此鳥都にて哥によみたること著聞集に見へたるは籠にかひたる鳥也、其時少将の内侍の歌、吹風ものときき花の都鳥おさまれる世のことやとはまし、此哥續古今集にも見へたり、都鳥は万葉には難波堀江によみ、順家集にはこしの海にもよみたり、又都の人をさして都鳥とよみたる歌もあまた有り、

名にしおは、いさこと、はん都鳥わか思ふ人は有やなしやと45才」

此哥古今集羈旅の部、業平朝臣と有り、哥の心、都にすまぬ鳥ながら都鳥と

いふ名なれば定而都の事はしりつらん、わか思ふ人の都につゝかなくつてあるやいなやをとまほしきとの心也、斎宮女御の御集に、人を猶うらみつべし心（ママ）や都鳥有りやとたにもとよをきかねは、和泉式部哥、こと、は、有のまに／＼都とり都のことを我につけなむ、

舟こそりてなきにけり

こそりては華の字也、又合松の二字を日本紀に45ウ「舟こそりてとよませたり、おしなへてといふ心に見るへし、舟中あまたの人の此業平の哥を聞て皆都に思ふ人あれはおしなへて落涙をせし躰也、此段の心を俊成卿の歌に、隅田河故郷思ふたくれて（ママ）なみたをそふる都鳥かな、此哥新拾遺集旅の部に入たり、京に有りわひてと云よりこゝにいたるまで余情かきりなし、心をつけて見るへし、

十【朱】

昔男むさしの国まで

前段のつゝき也、此段の終に人の国にても猶か、46才「る事なんやまさりお（ママ）るとかけるにてあつまへり（ママ）くたられけることは好色の誤りて（ママ）しるへし、かゝる事とかけるは好色の事也、まとひありきけりとは身の一かたにおちつかすして漸々此武蔵の国にしはらくすめる間のことゝみるへし、

父はこと人にあはけ（ママ）んと

父はこと人にあはせんとは業平をむこにとる事は過分の事に思ふ心也、又一説に父氏なき人ゆへ人を不撰、只時を得たる人をむこにとらん(ママ)思ふ心也ともいへり、46ウ」

あてなる人に

あてなる人とは業平をさす也、貴の字、又勝の字をあてとよめり、やさしき人の心にもみるへし、

父はなを人にて

父はなを人とは直人と書てなを人とよめり、た、人の事也、此物語のすゑに源至か哥を評て色このみの哥にてはなをそありけるとかけるも直の字也、父はしないやしき人ゆへ業平のやんことなきを不好、母は氏ある人にてしかも四性(ママ)のうちに賞翫する47オ」藤原氏ゆへ業平をむこにとらんとおもへるなり、父と母との心さす所かはれる事をことほりたる也、

此むこかねによんで

むこかねとはむこの器量いふ(ママ)心也、いまたむこにはせされとも末々むこにせんと思ふ心ゆへ、むこかねとはいへり、うつほ物語に女御ささきかねと有り、源氏物語、紅葉賀、乙女の卷等に、ささきかねと有も同じ心也、かねて后に成るへき器量あ(ママ)人をいへり、坊かねといふも東宮に成り給ふ47ウ」へき宮をいふ事也、

すむ所なんいるまのこほり

是は大和にもみよしの、里あるゆへこ、にむさしの入間郡なることをことは

りたる也、入間を萬葉にはいりまちともよませたり、いまの川越也といふみよしの、たのむの雁もひたふるに君か方にそよるとなぐなま

此哥、續後拾遺集恋一よみ人しらすと入る、たのむの厂は古来より説々ある事別記にくわし、田面の雁を可用、袖中抄、俊頼の説に万葉集の哥を引て、

さかこゑてあへの田面にいる田鶴のと48オ」もしき君はあすさへもかな、

此哥田鶴の哥なれとも田面といふ義同し、ひたふるは日本紀に永の字又頼の字を書してひたふるとよませたり、ひたすらといふて(ママ)同し、よるとなくみまるといふを厂的声のよるく」と鳴様に聞ゆる故かくよめるといふ説はおほつかなし、た、田面にすむ厂までも業平に心をよするといふ心に見るへし、うらの心は母の心に業平に心をよせてむこにとらむと思ふよし也、わか思ふ心を厂によせてよめる也、定家卿の哥に、たか方によるなく厂的聲たて、48ウ」なみたうつろふむさしの、原、

わかかたによると鳴なるみよしの、たのむの厂をいつかわすれん

此哥も續後拾遺集に業平の哥と入れり、いつかわすれんとは母の心さしをいつかわすれん、わする、時はあらしとの心なり、

人の国にても

是は作者のことほ也、業平の事を評していへり、好色の事にてあつまに下れる人の猶こりすまにか、る心のある事をそしりてかける也、万葉集に他国と書て人国とよめり、こ、49オ」にてむさしをさしていへる也、

十一【朱】

昔勇あつまへゆきけるに

業平ともとする人ひとりふたりして行けるか、その友の道より帰るにことごとく、都の人にいひやりけるにや、又あつまより都の友たちにいひおくりたる哥とも見るへし、たゞし此哥に附て不審あり、拾遺集雜上に、橘忠幹（モト）か人の女にしひてものいひ侍りける比遠き所にまかり侍るとて此女のもとにいひつかはしけると有り、しかれは業平より後の人の哥なるへ49ウ」きにや、橘忠幹は作者部類に天曆の比の人と有り、忠幹か業平の哥を今更書ておくれるならば拾遺集には業平とこそ入へきに作者をもあらはされすこと書にかゝれたる事不審也、後水尾院御説には拾遺集のあやまり成らんと書せ給へり、俊成卿古来風躰抄に拾遺集の哥あまたのせられたる中に此哥有り、こゝと書に遠き所にまかるとて女につかはしける大江為基と有り、近來契沖か考に古本には橘忠もとか女にと有りて作者大江為基とありたり（ママ）を後の本に50オ」作者を書落しけるにやといへり、猶好本を可考、

忘るなよ程は雪井になりぬとも空行月のめぐりあふまで

哥の心、たとへは都とあつまと雪井はるかに隔てすむとも空行月のことくめぐり逢まではむかしの契をわするなよとの心也、狭衣の哥に、めぐりあはんかきりたになき別哉空ゆく月のはてはしらねは、

十二【朱】

むかしおとこ有けり

此段はことに作り物かたり也、此段の事を大鏡に「柔の後御事として堀川の  
おと、国経の大納言な50ウ」とにとりかへされたる事の様に書たるは尤不  
審也、つくりものかたりと見えし、たゞし一段のかき様も前後昆雜して書た  
る様也、心を付て見されは文章前後相違あり、

人のむすめをぬすみて

つくり物語なれば此女誰人なる事を不知、業平しはらく武蔵の国にすまれし  
間の事に書なしたるなり、

むさし野へみてゆくほとに

むさし野まで女をつれ行たれとも国の守より51オ」追手か、りからめとら  
れたりと大意を書て、その次に又其事をくすして書たるなり、

女をは草むらの中にをきて

むさし野まで女をともしなひ出たれ共詮方なき故女をは草むらのうちにおきて

男は外ににけ行てかくれ居たる躰にみるへし、

みちくる人

みちくる人とはあまたみちてくる人といふ説あれとも道來る人の説につくへ  
し、萬葉集に玉ほこの道來る人とつゝけたり、道に追來る人といふ心、51  
ウ」

此野はぬす人あなりとて

此野はもとより盗人のこもれる野也とて火を付たる心成へし、又ぬす人ときさ

したるは男をさしてもいへるなるへし、いつれにても此野にかくれたる者  
かり出さんとて火をつけたるなるへし、

むさし野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

女は草むらの中に捨をきて男の行えしれされ共猶此野にあらんと思ひわひて  
此哥をよめるなり、此哥は古今集春上に題しらすよみ人しらすと入て、はし  
めの句、春日野はとあり、かの集にて「52オ」は野遊の歌と見る事(ママ)  
也、此物語にては五文字をむさし野、(ママ)直してとりあわせてつくりた  
るなり、けふはなやきそはけふは焼ことなかれといふ心也、なの字は下知に  
見るへし、若草のつまとは日本紀仁賢天皇の紀に弱草吾夫天怱怱(ワカクサワ  
カツマアハレ)と有り、若草はつや、かにてみるにあかねは夫婦のなからひ  
によそへて男女かよはしていふことは也、此野にはわかつまもこもりわか身  
もこもりたればけふは焼ことなかれとの心也、萬葉集の哥に、おもしろき野  
をはなやきそふる草にひ草ましり52ウ「おひはおふるかに、  
女をほとりてともにゐて

ともにゐてとは女をつれて帰りたる心也、又女をほとり返し男をはからめて  
ともに帰るとも見るへし、いつれにても義同し、

### 十三【朱】

昔むさしなる男

是も業平のむさしにすみたる間の事と見るへし、きこゆればはつかしとは都

の女のもとにわかあつまにての有さまをあからさまにしらせんこともはつか  
しく又しらせねは心くるしく思ふ53オ」との心也、是迄男のもとよりおく

れる文のことはと見へたり、その文のうはかきかき(ママ)にむかし(ママ)  
にすむことをしらせんとておほめきてむさしあふみとは書たる也、日本紀に  
題の字をうはふみとよませたり、上書と書に同じ、紫式部のうたに、北へ行  
雁のつはさにごとつてよ雲のうた(ママ)かきかきたへすとも、むさしあふ  
みは此国の名物なり、讃岐園座などいふごとく其国の名物を何となくうは書  
に書て美はわかすむ国を女にしらする也、あふみはかくるものなれば聞へや  
せん間53ウ「へせましとふたつの間をかけたる心にも見るへし、

むさしあぶ(ママ)さすかにかけて頼むにはとはぬもつらし間もうるさし  
あふみはさすかといふことは縁のことは也、業平あつまに下り人のむこなど  
に成りたることを聞に、あた人とは思ひながらさすかにかけてたのむ心には  
かきたえてとはぬもつらく、又とふもうるさくおもふよし也、ふるき哥に、  
さためなくあまたにかゝるむさしあふみいかにのれはかふみはたかふる、  
とあるを見てなん54オ」

たへかたき心ちとは男の此女の哥を見て其心さすかに恨みはてさるをたへか  
たく思ふよし也、わか方の事をしられしとは思へとも女の心の切成る故たか  
へ(ママ)かねて此哥の返しをしたる心にも見るへし、

とへはいふとはねはうらむむさしあふみかゝるおりにや人はしぬらん

とへはいふとは、とふ時はうるさしといひとはぬ時にはつらしといふ、如此

女のもとよりいひ(同字ミセケチ)かけたるをみては男の心思ひわつらひて  
進退こゝにきはまりて此時思ひに人もうせはてんと心也、人は死ぬらんと  
はヶ様の思ひ切なる時には世上の人もいのち54ウ「絶るわさならんと心  
也、萬葉集の哥に、恋しなは恋もしねとや玉はこの道ゆき人にこともつけ、  
ん、古今集の哥、恋しねとするわさならしむは玉のよるはずからに夢に見へ  
つ、これらの哥思ひの切成よりのちの絶んとすることをよめる哥也、い  
まの心に似たり、

#### 十四【朱】

むかし男みちのくに、すゝろにゆき

此段と次の段は作り物語なるへし、業平むさしの国にも住わひて猶みちのく  
まで心ならず行てすまれしほどの事を書んとて、萬葉の哥など55オ」をと  
りいれて作れる成るへし、すゝろは心ならず也、座の字を書り、しきりの心  
もあるへし、そこなる女とはみちのくにすめる人と見へたり、誰ともなし、  
京の人といへるは業平の事也、美男といひて雲の上人なれば田舎の人の切思  
ふへき事也、思ひかけたりともかゝて切におもへると書る、おもしろきよし  
なり、業平のいまた許容なき時によめる哥なるへし、  
なか／＼に恋ししなすはくはこにそ成へかりける玉のをはかり

此哥は万葉集第十に作者不詳、中／＼に人とあらずはくわ子にそならましも  
のを玉のをはかり、55ウ」此歌を少し作りかへて女の哥としたる也、男の

つれなきに思ひわひて恋しなんと思へともそれもかなはぬものならはしはし  
のほとも此桑子にならはやと也、くわこはかいこ也、田舎女の手かくるもの  
なればそのくわこの思ふことなげに桑の葉のみうちくひてあることをうらや  
みたる心也、かいこは食して不飲、廿二日にして化すと淮南子に見へたり、  
しかれば命みちかきものなれば玉のをはかりといへり、この玉をはしはしは  
かりといふ心に見る(補入)へし、

哥さへそひなひたりける56オ」

哥はいなか人の哥にもよき哥あるものなれとも此女の哥はまことに(ママ)田  
舎めきたる歌也と思へとも、さすかにその心さしの切なる所をあはれみてそ  
の夜行夜行(ママ)てねたる也、是業平の人をすてぬ本情を書けり、夜ふか  
く出にければとは、田舎人のことなればよろこぶつ、かに心もおろかなる故、  
男の心のとまらざる躰也、されはあぐるをもまたて立出るとなり、源氏末摘  
花の巻に、何事につけてか御心もとまらん、夜ふかく出給ふとかけるに同じ、  
夜も明はきつにはめなそくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる56ウ」

此哥も田舎人(補入)の哥にて不骨の哥也、きつはきつねの下畧也、萬葉集  
第十六に、さすなへにゆわかせ子ともいちひつのひはしよりこんきつにあむ  
さん、是もきつといへるはきつねといへる心也、はめなてはくわせでと云心  
也、竹取翁物語に、きぬたにぬきかへなてと有に同じ、くたかけは鶏の事也、

東國のならひ家をくだといふといへり、かけは家鶏也といふせつはあし、  
古事記に八千鋒の(右傍二鋒ノ字)神の御哥に、庭つとりかけはなくとよま

せ給へり、又神楽哥に庭とりはかけろとなきぬとも57才」よみたれば、鶏

よろこほひて

をかけとよめるは神代よりの詞と見へたり、其鳴聲のかける（右傍二ろノ字）と聞ゆる故やかて其鳥の名とせるなるへし、せなど夫をせとよませたり、夫になの字をそへたる也、哥の心、わかおつとを早く帰せしはくたかけのはやく鳴たる故也、しかれば此鳥にうらみある故夜も明は此鳥をきつねにくわせよかしとねかゑる心也、誠に田舎人の哥なるへし、

男京へなんまかるとて

是は女のもとにしはらく通へる後の事なるへし、57ウ」男の心に女をあさむきてよめる哥也、

くりはらのあねはの松の人ならば都のつとにいさといはましを

古今集第二十あつま哥に、をくろさきみつの小嶋の人ならば（ママ）ある哥

十五「朱」

を直して入たる也、くりはらは郡の名也、此所にあねはといふ所ありてその

昔みちの国にてなでうことなき人の

所に名有る松などのありたるなるへし、もし此女さた過て色を好めるゆへあねといふによせたるにや（同字ミセケチ）、女を松にたとへて、やかてわか

此段つくり物語と見へたり、なでうことなきはさせざる事なき人といへるに同じ、人をかろしめていへることは也、清少納言にくきものといふうちに、何条事なき人のす、ろにゑかちにて物いひたどる（ママ）と有り、又源氏物

都に帰る家つとに此女をともなひて田舎にもかやうの人ありと都の人に見せ

語あつまやの巻に、何条事なき人のすさましき願したるとあり、皆同じ心な

まほしく思へ58才」ともあねはの松のことく外にうつされざる人なればい

り、

さなひかたしとの心なるへし、いはましをのをは心を残したるてに（にてフ

あやしうさやうにて

ミセケチ）はなるへし、いはましものをと心得へし、此あねはの奈の事、う

あやしうはあやしむ也、男の心に此女のか様に59ウ」何条ことなき人の妻

つほものかたり、きく人はあねはの奈の風なれやむかしの声を思ひ出るは、

にてはあるまじきとあやししく思ふ也、又あやしはいやしといふ心にも見るへ

此哥もあねといへるにとしふりたる人の心ときこゆ、

に

し、やんことなき人にもおとらざる女のいやしき男をもちたるか不心得、業平のおもへるにてあるへし、ひそかに其女のもとに通へとも心より（ママ）き人にて心のうちのしれざる故此哥をよめる也、

忍ふ山のひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく

忍山は陸奥の名所故、所からにていひ出たるなり、此哥新勅撰恋五に業平朝臣と入たり、人のもとにひそかに通ふことく人の心うちにもしのひて通ふ道60才のあれかし、其われを思を思ひは（ママ）思はざる心の底をみるへきと也、古今集の哥に、思ふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝ、みるよしもかな、此哥にて心得へし、

女かきりなく

此哥にて業平の女を切に思ふ心あらはれたればめてたしと思へと、は書たり、めてたしはあはれにおもへる心也、さる（ママ）なきは不祥の字、悪の字、皆さがとよめり、なきは添字にて心なし、わろき心をいへり、えひす心といふも田舎人の心つたなた（ママ）なきをいへり、女の心に男の哥をあはれみて、われをせちに思ふとはしれとも60ウ「わかえひす心のさかなきをあらはさは業平のうとまん事を思ひて、いか、はせんと思ひなやみたる躰也、さきの段の女は業平のあざむくことはまこと、よろこひて人にまていひおりたるに、此段の女は心ふかく切に思へとも猶田舎にありて心のさかなからんことをはちたる所いふかし、又一説に業平の心に此女をせちに思へともさかなきえひす心を見出したらん時いか、あらんと思ふ心に見たる説も有り、い

か、はせんといふ迄にて、はの字はこと業の助に61才」みるへし、

十六【朱】

むかしきのありつねといふ人有けり

ありつねは三代実録第三に傳くわし、元慶元年正月廿三日從四位下周防權守紀朝臣有常卒すと有り、年六十三、紀名虎の子、業平の舅ながら此比は紀有常かむすめをはなれてこと人のもとにかよへる時の事なるへし、業平の子棟梁は有常かむすめのはらにて嫡子也、滋春は次男にて染殿の内侍の腹也、此段は傍友（ママ）の信あることをかきたるだん也、61ウ」

みよのみかとに

みよの御門につかうまつるとは、玄旨の説、淳和仁明文徳此三代につかへ清和天皇の時惟喬親王の御外□（一字分空白）故名虎方の人は其家おとろへたる時の事と有り、然れとも国史を案するに三代といへるは仁明文徳清和の三朝なるへし、此ものかたりにては清和の時家おとろへたる様に見へたれとも貞観の末のとし迄官位と、こほりなく進まれたる事国史に明白也、しかれば此段も作り物語と62才」見るへきにや、

世かはり時うつりにければ

世かはり時移るとは天子の御代うつりかはりて時有し人も時なくなれる心也、是世の有さま也、如此時うつり家衰へたれ共有常の心世の人のことくに（脱カ）あてはかなること、はあてはたつとき心、はかは添字なり、いふ心は其

心のけたかき事なみ／＼の人に似す、まつしければへつらう心いつるならひなるに猶むかしのよかりし時の心のまゝにて、みさほのかはらさるることをほめてかけり、是迄を62ウ「此段のうちにて序と見るへし、よのつねのこともしらすとは世わたるわざには心なくた、風流をのみこのめる心にも見るへし、

としころあひなれたるめ

とし比あひなれたるめとはつまの事也、此つまこゝろあさき人にて有つねのまつしきをいとひて夫婦の間むつましからさる也、床離は夫婦臥を同しうせさる事也、やう／＼といふことは心を付て見るへし、はしめより夫婦の中あしきには非す、家おとろへまつしくなるにしたかひて63オ「つまのおつとをいとひたる也、太公望か妻、朱買臣か妻のたくひなり、

つゐにあまになりて

夫をいとふ心ます／＼ふかく、わかあねの先たちて尼に成りたるかもとへみつからもあまになりて行たる躰也、源氏ものかたりは、木、の巻しなきため、に合せ考ふへし、心あさき女の躰也、

男まことにむつましき事こそなかりけれ

有常か心にもとよりこの妻は真実にもつましき事はなかりしかとも年久敷あひなれし中63ウ「なれは今は是までとて尼に成てゆくをあはれと思ふ心也、是人の心也、しかれ共有つねか家まつしき故其妻に尼のそうそくなど調うし、ておくるほどの事も得せさるることなり、あはれなるさま也、

思ひ（ふノミセケチ）わひて

思ひわひてとはいかにもせんかたなきゆへにねんしわひて業平は信友なる故この事をいひおくれる也、是朋友（ハウユウ）の信也、舅の時にはあらずとみるへし、

かう／＼今はとて64オ」

かう／＼とは如此と云心也、如此年久しき妻の尼に成りてあねのもとにゆけとも、おくるへきものいさ、かもなしと也、日本紀に小の字をいさ、（ママ）とよませたり、少のものにてもおくりたく思へともそれさへかなはずとの心也、扱哥には其妻の久しくわれにそひ居たる年の数をいひて如此年久しくそひたれ共いまはわれをいとひてあまになりたるといふ心をあらはせり、

手を折てあひみしことをかそふれはとをといひつ、よつはへにけり

手を折てとはゆひをか、めてものをかそふる躰也、64ウ「万葉に指折と書て手を折てとよめり、十といひつ、よつとは四十年といふ説と又十のあまり四といふ説と二説也、いつれにも年久しくあひなれたれとも夫をいとふ所に女の本情見へたり、は、木、の巻にこゝをとりて、手を折てあひみしことをかそふれはこれひとつやは君かうきふし、此哥はこれひとつやはといふに年月馴たるうちにうかりし事の多きをこめたり、

かの友たちこれを見て

かの友たちとは業平の事也、此事を聞、此哥を65オ「見てせちにあはれとおもひて色々の品をおくれるうへに夜のものまでおくれりといへるにて、業

平の心さし傍友（ママ）に信あることを見るへし、其上に有つねかつまの心さしひたすら浅きにもあらしといふ心を哥によみておくれるなり、  
年たにもとをとてよつはへにけるをいく度君を頼みきぬらん

年たにもといふに心をつけてみるへし、夫婦の間もとよりうとき人ならば四十年來かたらふへからず、其多くの年月のうちには幾度となく有常の事をたのむ心もふかくありつらめ、しかれとも65ウ「いま是非なく別る、は女の心にもさこそかなしく思ふらんと女をたすけてよめる心、きとくなり、  
かくいひやりければ

かくいひやりたりければとは如此いひて数々の品をおくれるを、有つねのかたしけなくおもひて、その心を哥へのへつくしかたきぬへ、はしめには業平のおくれるきぬのことをほめ、つきの哥には業平の心を感じるなみたのことをよめり、一首あはせて心得へし、

これや此あまのは衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけれ66才

これやこのとは是や此業平のおくれるきぬはと云事也、あまの羽衣は天人の着するもの也、あまになる人におくれるためにおくりたるきぬなればそへてよめるにもあるへからず、むへしこそはむへこそにて尤といふ心なり、君かみけしは君よりたまはるきぬなり、奉るはきる事也、哥の心、この業平のおくれるきぬは天上のあま羽衣（ママ）と見たるも尤也、大かたのきぬにあらす、君よりたまはりて業平の着し給ふへきぬ（ママ）をおくられたるものならんとの心也、又説、君かみけしとは業平の着し給ふ66ウ「きぬなれば天

人の羽衣に同じとほめたる心にもみるへし、日本紀には衣裳と書てみけしとよみ、萬葉には御衣と書てみけしとよめり、

よろこひにたえて又

まへの哥には衣をほめたるはかりにてよろこひの心たらざる故また此哥をよみてよろこひにたへすしてよみておくれる也、

秋やくる露やまかふと思ふまであるは涙のふるにそ有ける

此哥は新古今集雜上に紀の有つねと入たり、秋やくるとは秋は露のしけくおくものなれば我袖の67才「かくのことくにぬれたる事は秋の来りて露のおきまかへたるかと思ふほと袖のぬれたるは秋の来るにもあらず、又露のおきたるにもあらず、業平の心さしをかたしけなく思ふなみたの袖にふるかことくにかゝりたる也の心也、この時秋やくるとよめるを思ふに夏の時にて可有、此無（ママ）涙の事のみいひて猶よろこひの心をは其外にあらはさる事故人の哥なり、